

論文

## 長 沢 鼎 と 磯 長 家

森 孝 晴<sup>1)</sup>

1) 891-0197 鹿児島市坂之上 8-34-1 鹿児島国際大学

### 1. 長沢と磯長家の直接の関係

長沢鼎（1852-1934）の実家は城下（鹿児島市）の磯長家であり、彼の本名は「磯長彦輔」である。現在は、本名よりも「長沢鼎」の名の方が知られている。それもそのはずで、長沢は、本名を13歳までしか使っておらず、その後は82歳で亡くなるまで「長沢鼎」で通したからである。

そもそも「長沢鼎」という名は「変名」、いわゆる偽名であって、薩摩藩英国留学生プログラムが実行される際に藩主から授けられたものである。多くの学生は変名を日本帰国時に本名に戻したりして、以後は使用していない。しかし、アメリカ移動時の長沢の同志であった松村淳蔵と長沢だけが、留学生プログラムが終了した後も終生変名を使い続けたのである。まさに、武士道精神の中で最も重要な「忠義」に生涯を捧げたわけだ。

現在長沢の墓は、鹿児島市内の興国寺墓地内にある。彼の墓（石）は、同墓地内の磯長家墓所にあり、本家の墓よりやや小さいものが建てられている。武士の墓が多い同墓地内に、今は、以前にはなかったいくつかの看板もできていて、中腹にある長沢の墓の場所には「長沢鼎の墓」と書いてあるので、かなり見つけやすくなっている。

この墓を見ると磯長家の心情が伝わってきて胸が熱くなるのである。普通は人が亡くなると本家の墓に入ることが当然であろうが、磯長家の人々は少し違う考え方をしたと思われる。長沢が1934年にカリフォルニア州サンタローザ市で亡くなったあと、遺体はカリフォルニア州オークランドで荼毘に付され、その後はサンフランシスコ南部のコルマにあるサイプレス・ローン・メモリアル・パークに保管されていた。長沢が留学生として出国して以来実に87年ぶりに遺骨がようやく帰国するのは、第2次世界大戦後の1952年10月のことだった。

この時遺骨を日本に運んだのは、長沢の甥（すなわち姉



図1 長沢の墓（左、筆者撮影）

モリの息子伊地知共喜）の息子伊地知幸介であった。共喜も幸介もサンタローザで長沢とともに暮らした事実上の家族であった。磯長家の末裔でもある幸介が長沢の遺骨をついに帰国させたことは感慨深い。そして、磯長家の本家当主で長沢の兄吉輔の孫の磯長純二氏が、東京の赤星家の墓に埋葬されていた長沢の遺骨を鹿児島に持ち帰った。のちに鹿児島市易居町の不断光院に安置された遺骨は、最終的には、すでに触れた同市冷水町の興国寺墓地内の磯長家墓所内に永遠に埋葬された。

磯長家の人々は、興国寺墓地やそこに設置された磯長家の墓所に長沢の遺骨を納める際に、彼が「磯長」を捨てたとは考えずに、生涯変名の「長沢鼎」を使用し続けたことを武士の誉れと考え、一族の墓所内に「長沢鼎」の墓を建立したことは間違いあるまい。磯長家にとっても誇るべき存在の長沢だが、親族は「死んでも長沢」という彼の心意気を重く受けためたのである。

長沢の父、すなわち吉輔やモリの父親は、磯長孫四郎周徳で、母はフミである。門田明の『カリフォルニアの士魂—薩摩留學生長沢鼎小伝』によれば、周徳の生年や没年を示す資料は見当たらないが、フミは、文化8年4月28日（1811年6月18日）生まれで、鹿児島郡下荒田町松元



図2 本田幸介（鹿児島国際大学所蔵）

勘左衛門の次女であった。長沢はフミが40歳の時の子で、彼女は明治14年（1881年）10月18日に、東京府下北豊郡元王子村で亡くなっている。

長沢は8人兄弟の7人目、周徳の四男になる。長男が吉輔で、この人の家系が現在の磯長家の本家である。二男は喜之助、三男は平八郎、その下に女性が3人続く。長女がトク、次女はモリ、三女がコマであるが、トクとモリは長沢と特に親しかったようで、両者の息子たちとは生涯にわたり深い協力関係が続いた。長沢の下にはもう一人、弟の弥之助がおり、この弟は赤星家の養子となるが、弥之助の息子鉄馬は晩年の長沢に多額の援助をし、力を貸している。

## 2. 磯長家の長沢周辺の人々

磯長家の家格は「小番」だったと言われている。城下士7000人の中で上位900人に入る家格だ。中級武士になるのだろうか。ただ、磯長家は実は学者（暦学者）の家系なので常に薩摩藩の中で重要な位置にいた名家だと思われる。また、幕末は家格にはあまりこだわらない時代でもあったので、長沢のような超エリートが生まれたのだとも言えるかもしれない。

磯長家には、歴史的に見て、名を遺した人々が長沢以外

にも存在した。まず、長沢に近いところでは、兄の喜之助がいる。『島津斉彬言行録』の四之巻には「一、磯長喜之助へ御密書ノ類謄寫命ゼラレシ事」という項目があり、斉彬が喜之助に直接命を出していることがわかる。また、この項目の中には、

磯永喜之助ハ可也學識モアリ、特ニ書跡見事ニ出來、寫本達者ノモノニ候間、御手許ノ寫本命ゼラレ、中ニハ他見ヲ充サレザル御書類或ハ御草稿ノ清書ヲ命ゼラレ、浩然亭ニオイテ寫スベキ旨、御沙汰遊バサレ候コトモ毎度コレ有り候、ソノ時ハ浩然亭ノ近所ニハ誰モ立入りヲ禁ゼラレタリ

と記されている。喜之助は斉彬の信頼がよほど厚かったと思われるが、仕事の力量も高かったに違いない。『赤星鉄馬 消えた富豪』（以下、『赤星』と略す）の中にも、

反射炉建設を担当した江夏十郎が集成館閉鎖の無念をしたための手紙がある。「杯血涙声ヲ吞居候」という面々のなかに、磯長喜之助の名が見える。…藩校「造士館」の書役（文書管理担当）であった。

と紹介されている。

また、『赤星』によれば、弥之助の息子赤星鉄馬（1882 - 1951）は、父親の莫大な資産を受け継いで若き資産家になった人物だが、銀行を開業し、朝鮮に大きな農場を設立した実業家としても知られている。鉄馬は、日本初の本格的学術財団と言われる「啓明会」の創設に尽力したことで、「鉄馬は近代学術研究という目には見えない大きな資産を残したのである」（『赤星』）と評価されているし、釣りの世界やゴルフの世界でも知られている。

さらに、農業という共通点もあって、長沢の姉トクの息子本田幸介は、長沢と深く親しく交際した人物で、かなりの大物である。『赤星』から引用してみよう。

本田幸介は、元治元年（一八六四）薩摩に生まれた。父の野村盛秀は……彼の妻、すなわち本田の母が、赤星弥之助の長姉トクであり、鉄馬にとっては伯母になる。野村夫妻の次男として誕生した野村幸熊は、ほどなく本田伸次郎の養子となり、名を本田幸介とあらためた。

明治十三年九月、上京して駒場農学校農学科（のちに東京農林学校）に入学。同時に入学したのが、彼と従兄

弟の関係になる磯長海洲（タイの写真師）であった。海洲は1年余りで退学してしまうが、本田は勉学をつづけ、卒業後は農商務省に入省、二十二年から東京農林学校教授となる。・・・

東京帝国大学教授として畜産学を担当していた明治三十年、アメリカから長沢鼎が三十二年ぶりの帰国をしたおりに、赤星弥之助郎（市谷加賀町）で撮影された一族の写真（第二章）の中には本田の姿もある。当時十五歳の鉄馬とも会っていたのだが、・・・

本田は明治三十六年から農業調査のため大韓帝国に派遣された。その三年後、漢城（現ソウル）から四十数キロ南方の水源に統監府勸業模範場の設立計画が立案され、・・・本田は初代場長に就任するとともに、付設の水源農林学校校長の任にあたった。本田は朝鮮植民地農政の確立に多大な影響を及ぼした人物として知られ、のちに九州帝国大学農学部初代部長、宮中顧問官などを歴任する。

『植民地朝鮮の勸業政策』によれば、本田幸介は「日本最初の農学博士の一人」となった人で、韓国中央納会副会頭になったり、九州帝国大学教授の傍ら帝室林野管理局長官や史跡名勝天然記念物調査委員を勤めたりしている。

### 3. 磯長家の系図関係について

さて、長沢以前の磯長家の系譜や先祖についても見てみたい。鹿児島国際大学の長沢鼎展示室兼資料室には一つの珍しい手紙がある。これはトクの子孫が大学に寄贈してくれたものだが、磯長孫四郎周徳（長沢の父）の父（長沢の祖父）吉徳がトクの親族に与えた命名書である。代々暦学者をしてきた磯長家では当主は一族から尊敬の的となっただろう。だから子供が生まれると当主や前の当主などに子の名をつけてもらうということは普通のことであったと思われる。

では、磯長家とはどこからやって来た一族であろうか。城下士となるまでのいきさつを再び『赤星』によってたどってみよう。

磯永家がもとは「磯長」という字をあてていたのは、河内国南河内郡の磯長村（現大阪府南河内郡太子町）を出自とするからで、一族の中でも「磯永」と「磯長」の二つの表記が混在している。室町時代に四国を経て、

交易地として栄えていた大隅国小根占郷（現鹿児島県肝属郡南大住町）に移住したと伝えられている。

天文年間（十六世紀半ば）になると、一族は根占に來航する南蛮船との交易で財をなし、豪商として知られた。慶応四年（一六五一）に二代薩摩藩主島津光久が根占を巡見したおりに、銀子や贅沢な品々を献上して藩主をよろこばせたという記録がある。

磯長家に突出した才能の持ち主があらわれ、鹿児島城下に呼び出されたのは享保年間（一七一六—一三六）である。磯長孫四郎周英（磯永家の者は、代々「孫四郎」を名乗った）といい、彼は薩摩藩暦官の本田武兵衛に教えを受けたのち、江戸に出て幕府の天文方西川正休について学び、延享四年（一七四七）には幕府の暦官となった。さらに幕命により、京の陰陽頭土御門家に学んで暦法を伝授される。

このように、磯長家は、大阪を出自とし、現在の南大隅町に一時居住していたのである。そして、磯長の名を広く知らしめたのが磯長孫四郎周英だったのだ。この人物が出て以来、幕末に至るまで磯長家は暦学者（暦官）の家系となったのだ。しかも周英は、鹿児島市の繁華街として知られる「天文館」のもととなった施設「明時館」の創設に深く関わっているのである。

奥山博哉は、『ふしぎないきもの うなぎ物語』の中で、

ところで天文館って何だろうと思う人もいるに違いない。江戸時代島津藩は明時館をつくって天文観測を行った。この天文観測によりさつま暦が完成して大役を果たした。そして天文観測の先覚地として歴史をつくった。明時館があった場所は現在名の電車通り、天文館通り、ぴらもーる通り、ゴンザ通りの四つの通りでかこまれた約六百坪の土地そのもので、その中に天文台などいくつかの建物があった。その明時館が天文館という地名になって、現在に残った。

と述べている。当時の明時館周辺の状況については、唐鎌祐祥が次のように説明している。

明時館の広さは六百三十二坪（二千八十五平方メートル）あり、天保年間城下絵図によると、周囲は堀で囲まれ、数棟の建物と天体観測用と思われる、現在の天文観測ドームに似たドーム状の建物があり、傍らに高い旗が

立っており当時としては非常に人目を引いたと思われる。

また、『ふしぎないきもの うなぎ物語』巻末の「推薦のことば」において、鹿児島大学の面高俊宏は、

・・・現代の鹿児島は宇宙の最先端県といわれる。  
しかし、江戸時代の鹿児島県は宇宙の最先端であった。  
この天文館には島津藩の宇宙研究所である明時館があり、人々はこの研究所を天文館と呼んで親しんだ。夜空を観測し暦を作る最先端な研究が進められていた。

と紹介している。長沢の御先祖は、宇宙の研究に関わりが強かった。つまり、広く外の世界に目が向いていたということだろう。

では、明時館と周英の関係について、さらに『赤星』によって見てみよう。

周英は、宝暦十三年（一七六三）の日食を予測した天文学者のひとりでもあり、これにより「宝暦暦」の誤りが判明し、幕府は暦の修正をすることになる。周英は明和二年（一七六五）に没するのだが、彼の暦学は薩摩藩が幕府の許可を得て独自に使用した「薩摩暦」の礎となった。

八代藩主<sup>しげひで</sup>島津重豪は、長崎蘭学を積極的に導入したことで知られ、安永八年（一七七九）に天文暦学研究と薩摩暦編纂の施設「<sup>めいじかん</sup>明時館」(天文館)を設置した。その初代館長(暦正知館事)の水間良実<sup>みづま よしざね</sup>は磯長周英門下だった。明時館では<sup>こんてんぎ</sup>渾天儀、<sup>みづま よしざね</sup>枢星鏡、サングラスなどを使って天体観測が行なわれ、敷地内には、安政二年(一八五五)まで暦官役宅もあった。

周英のおかげで幕府が宝暦暦法の修正をすることになった経緯について『天文館の歴史』でさらに見てみると、

歴代の暦官に仁礼吉右衛門、本田親貞、本田武兵衛、磯長孫四郎(周英、筆者注)、水間良実、水間良純、水目良智、水間良包、寺師正容、磯長(孫四郎、筆者注)周径などがある。

磯長孫四郎周英は肝属郡小根占の郷士で、本田武兵衛に学び、後に江戸に出て天文方、西川正体に就いた。宝暦改暦のときは、京都梅小路の土御門家天文台で天文観

測に従事し、土御門家の弟子となり、帰国後、薩摩暦の<sup>へんさん</sup>編纂に従事した。

明和二年(一七六五)に亡くなっているが、官暦に記されていなかった宝暦十三年(一七六三)九月一日の日食を推歩(観測の結果からと天体の運行を推測すること)し、食分四分と予言し、それが的中して名を馳せたという。このことがもとで暦法が問題になり、幕府は宝暦暦法の修正をすることになった。

ということになる。周英は特大の成果を上げたわけである。このあたりから、磯長家は薩摩藩にとって重要な位置を確保していったのだろう。そのことが、ひいては長沢の薩摩藩英国留学生への選抜にも関わっていた可能性があるかもしれない。

ところで、『赤星』には磯長家の磯長孫四郎周英以降の家系図が掲載されている。また、鹿児島国際大学長沢鼎展示室兼資料室所蔵の詳しい「長沢鼎関係系譜」という系図には孫四郎周徳以前の家系は記されていないものの、門田明・テリー・ジョーンズ著の『カリフォルニアの土魂—薩摩留學生長沢鼎小伝』には、周英以降の略系図が掲載されている。また、渡辺正清著の『評伝 長沢鼎 カリフォルニアワインに生きた薩摩の士』にも磯長家の系図関係が言及されている。

この三冊を比較して真実に迫ってみよう。まず渡辺は、『評伝』の中で周英の子周径は長沢の祖父にあたる、つまり周径の子が長沢の父周徳であると述べている。しかし門田は、略系図の周英と周径の間にクエスチョンマークを置いているし、長沢の祖父は吉徳だとしている。『赤星』の系図では、周径と周徳の間の線を点線にしているが、著者の与那原恵は、周英と周径の親子関係を断定して次のように説明している。

周英を継いで薩摩藩暦官となったのが、子の孫四郎周径である。周径は、西洋暦学や航海側転術の導入に尽力し、石塚<sup>さいこう</sup>崔高らとともに世界地図「<sup>さいこう</sup>円球万国地海全図」(享和二年・一八〇二)などを編纂する。天体を眺めながら悠久の時の流れを把握し、また「世界」の大きさを実感していた当時の日本において稀有な一族の血脈は、その子孫に受け継がれることになる。

これは非常に具体的で説得力がある。これらを総合していくと、次のような系図が考えられるのではないか。

磯長孫四郎周英 — 周径 — 吉徳 — 周徳 — 彦輔（長沢鼎）

ほぼこの系図関係が正しいと思われるが、そうすると、長沢はこの秀でた人物磯長孫四郎周英の五代目（玄孫）ということになる。

次に、周径の孫となる磯長孫四郎周徳、つまり長沢の父周徳についてみていこう。与那原は周徳についてこう述べている。

周径に連なるのが、弥之助の父親磯長孫四郎周徳である。「薩藩御城下絵図」（安政六年）の高麗町（現上之園町）「土借地」区画に、磯長孫四郎の名が見つかった。磯長家の敷地は一反二十九歩（三百二十九坪）。近隣の武家と比べても広く、藩に重用されてきた磯長家の家格の高さがうかがえる。

彦輔が五歳、弥之助が四歳の安政四年（一八五七）、父孫四郎は藩命により、長崎海軍伝習所に派遣される。孫四郎は五十代半ばだっただろう。

伝習所生の顔ぶれは当初は幕府から派遣された幕臣で、そのなかに勝海舟、榎本武揚らがいる。設立二年目から諸藩の伝習生も受け入れられ、薩摩藩からは計二十五人が入所した。磯長孫四郎のほか、二十代初頭の五代友厚、川村純義らの顔ぶれがある。その後、劇的な人生を歩む五代は、彦輔・弥之助の人生にも深く関与していくことになる。

孫四郎は伝習所で砲術とともに測量術などを学び、薩摩に戻ったあと、藩内の弾薬工場を監督する「御徒目附火薬掛」の役職に就いた。

長沢の父周徳は、一族の遺伝か、やはり出来がよく長崎海軍伝習所に派遣されたが、のちに長沢が世話になる五代友厚や勝海舟ともそこで会っていたのだ。不思議な縁を感じる。彼らの交流について五代の側から見るとこうなる。

一八五七（安政四）年二月、五代友厚は長崎の海軍伝習所に藩からの伝習生として入り、勝麟太郎（海舟）をはじめとする幕臣や、税所四郎左衛門（篤敬、後の篤）、

波江野休右衛門（休衛）、川村与十郎（純義）、磯長孫四郎（周徳、筆者注）など薩摩藩士との交流を深めた。

また、勝との関係や周徳の孫「海洲」について与那原は次のように述べる。

ところで孫四郎は、伝習所学友である当時三十代初頭だった勝海舟（通名は麟太郎、海舟は号）と交流があったと考えられる。勝がカッテンデーケとともに薩摩を訪れたとき、孫四郎と再会した可能性もある。その二年後の万延元年（一八六〇）に、孫四郎の長男吉輔に初の男児が生まれ、その名を「海洲」といい、勝海舟を連想させられるのだが、偶然かもしれない。

ちなみに、この海洲は、成長したのちに日本を飛び出して明治半ばにシャム（タイ）で写真館を営み、アメリカやインド、メキシコを旅し、大正初期には朝鮮で従弟の赤星鉄馬と交錯することになる（『赤星』）。

#### 4. 磯長家と長沢

こうしてきてきてわかるように、磯長家は多彩な一族である。特に長沢との関係で注目しなければならないのは、やはりその知性だろう。学者、研究者としての色合いの濃い部分が、長沢をイギリスに送り、ワイン製造に関心を持たせ、ひいては日本に帰国することをためらわせた可能性は高い。ある程度家系で人生が決まっていたという言い方もできるかもしれないが、長沢の場合、むしろ家系によって獲得した性質を十分に生かして人生の環境、すなわち荒波を乗り越えていくことができた、と言った方がいいかもしれない。

また、磯長家は、世界や宇宙に羽ばたく一族のようでもある。暦学者として宇宙を相手に活躍したり、イギリス、アメリカ、ドイツ、朝鮮、タイなどに出かけて行って海外で活躍したりしている。今でもアメリカに住んで生き抜いている親族も多い。長沢はまさに磯長家の特質を典型的に持っている人物で、磯長家を象徴する人物なのかもしれない。

#### 参考文献

- 土井浩嗣 (2018). 『植民地朝鮮の勸農政策』 京都：思文閣出版。  
 原口泉 (2019). 『薩摩藩と明治維新』 鹿児島：志学館大学

- 出版会.
- 犬塚孝明(1974).『薩摩藩英国留学生』東京：中公新書.
- \_\_\_\_\_ (2013).「長沢鼎(かなえ) — 祖国近代化のはざままで—」『新薩摩学 知られざる近代の諸相変革期の人々』鹿児島：南方新社.
- Japanese American Curriculum Project, Inc. (1985). *Japanese American Journey The Story of A People* San Mateo, California: JACP, Inc.
- 門田明(1991).『若き薩摩の群像』鹿児島：春苑堂ごしま文庫1.
- 門田明, テリー・ジョーンズ(1983).『カリフォルニアの士魂——薩摩留学生・長沢鼎小伝』東京：本邦書籍.
- Kadota, Paul Akira and Terry Earl Jones (1990). *Kanae Nagasawa—A Biography of a Satsuma Student—* Kagoshima : Kagoshima Prefectural Junior College.
- 唐鎌祐祥(1992).『天文館の歴史—終戦までの歩み—』鹿児島：春苑堂書店.
- 上坂昇(2017).『カリフォルニアのワイン王 薩摩藩士・長沢鼎—宗教コロニーに一流ワイナリーを築いた男』東京：明石書店.
- 「九州の王様たち その軌跡」『九州王国』2021年5月号. 鹿児島：エー・アール・ティー株式会社.
- LeBaron, Gaye & Bart Casey (2018). *The Wonder Seekers of Fountaingrove*. Historia II Publication.
- 三木靖, 向山勝貞 [編] (2003).『街道の日本史 54 薩摩と出水街道』東京：吉川弘文館. n
- 宮下亮善(編)(2009).『西郷(せご)どんと薩摩士風』鹿児島：西郷隆盛公奉賛会.
- 森孝晴(1998).『椋鳩十とジャック・ロンドン』鹿児島：高城書房.
- \_\_\_\_\_ (2014).『ジャック・ロンドンと鹿児島—その相互の影響関係』鹿児島：高城書房.
- \_\_\_\_\_ (2018).『長沢鼎 武士道精神と研究者精神で生き抜いたワインメーカー』鹿児島：高城書房.
- \_\_\_\_\_ (2020).「日本ワインのルーツに長沢鼎がいる可能性について」『鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告17』鹿児島：鹿児島国際大学ミュージアム.
- \_\_\_\_\_ (2021).「ワイン王とポテト王—長沢鼎と牛島謹爾」『鹿児島国際大学国際文化学部論集』第22巻, 第2号. 鹿児島：鹿児島国際大学.
- \_\_\_\_\_ (2021).「長沢鼎と伊地知家」『鹿児島国際大学国際文化学部論集』第22巻, 第3号. 鹿児島：鹿児島国際大学.
- \_\_\_\_\_ (2022).「薩摩藩英国留学生宛ての大久保利通らの手紙について」『鹿児島国際大学国際文化学部論集』第22巻, 第4号. 鹿児島：鹿児島国際大学.
- 森孝晴, 三木靖(2016).『鹿児島歴史の旅—島津藩政と「薩摩藩英国留学生」—』(平成27年度特別講演会・かごしま県民大学中央センター連携講座解説冊子) 鹿児島：鹿児島城西ロータリークラブ・鹿児島国際大学
- 長沢鼎(1871).『長沢鼎日記』串木野：串木野市役所保管.
- \_\_\_\_\_ (1980,1994, 1997, 1998).『長沢鼎日記』の翻刻『鹿児島県立短期大学地域研究所「研究年報」』第9号(1980年), 第23号(1994年), 第26号(1997年), 第27号(1998年).
- 長沢鼎常設展示室兼資料室所蔵資料(鹿児島国際大学内, 約400点)
- 新渡戸稲造(1993), 奈良本辰也(訳).『武士道』東京：三笠書房知的生きかた文庫.
- \_\_\_\_\_ (2009). 奈良本辰也(訳).『英語と日本語で読む「武士道」』東京：三笠書房知的生きかた文庫. 原著は1900年に出版.
- Nitobe, Inazo(2007). *Bushido The Soul of Japan*. Tokyo: IBC Publishing, Inc.
- 野田幸敬 [編著] (2019).『系図研究資料 島津家家臣団系図集 上巻 各家各氏一族分出略系図』鹿児島：南方新社.
- 奥山博哉(2019).『ふしぎないきもの うなぎ物語』鹿児島：南日本新聞開発センター.
- 島津斉彬(2008).『島津斉彬言行録』東京：岩波書店.
- 多胡吉郎(2012).『海を越え, 地に熟し 長沢鼎 ブドウ王になったラスト・サムライ』東京：現代書館.
- 田村茉莉子(2018).『五代友厚—富国強兵は「地球上の道理」—』京都：ミネルヴァ書房.
- 鷲津尺魔(1933).『長沢鼎翁伝』：鹿児島国際大学蔵.
- 渡辺正清(2013).『評伝 長沢鼎 カリフォルニア・ワインに生きた薩摩の士』.鹿児島：南日本新聞開発センター.
- 与那原恵(2019).『赤星鉄馬 消えた富豪』東京：中央公論新社.